

# 語彙からみた大学リスニング教材

吉田 国子

東京都市大学では、2010 年度から全学統一カリキュラムによる英語教育が行われている。統一教材、統一シラバス、統一試験による語学教育である。様々な専攻や様々なレベルの学生を対象とするが、その中から共通項を見出して大多数の学生に合った教科書を選定することが求められる。また一部の動機づけの高い学生を除いて、英語の授業のみが英語に接する唯一の機会である、という学生も少なからずいるのが現実である。それだけに授業の教科書は英語のインプット源として大切な役割を果たす。本稿ではそこに着目し、使用語彙の観点から授業で使用したリスニング教科書を分析し、語彙使用の妥当性と問題点を検証する。

キーワード：リスニング、語彙力、教科書分析、KH Coder

## 1 はじめに

外国語でのリスニングにおいて、学習者は場面に応じてボトムアップ処理とトップダウン処理を組み合わせることで内容を理解していく。ボトムアップ処理では、音素を識別してそれを単語として認知し、文を組み立て、会話構造を解明して全体像を把握する。トップダウン処理では、コンテキストやトピックについての知識、過去の経験など、さまざまなレベルの背景知識を使って、意味を予測する。熟達した学習者の場合、音素の識別、単語の認知は自動化され、足りない部分を前後関係から補い、これから出てくる言葉を予測して聞くなど、トップダウン処理の割合が多くなっていく。

近年の英語教育研究では、語彙知識の重要性が再認識されるようになっており、語彙の指導にも大きな関心が集まっている。まだ研究数はリーディング力と語彙力の関係に着目したものには及ばないが、リスニング力と語彙力の関係に注目した研究も盛んに行われるようになってきた。例えば、三根らは二種類の語彙テストを用いてリスニング力と学習方略の関係を調査し、語彙テストの成績と英語スタンダードテストのリスニングパートの得点には、相関関係があると結論づけている [1]。さらに三根らはこの研究の中で、リスニング・スキル向上のために語彙力を増強することが有効であるが、学習者に負荷が大きい語彙の提示を避ける必要がある、としている。その後枝澤らは 2007 年に TOEIC® で測定されるような英語力向上のためには、基本 2000 語をできるだけ早くマスターさせることと、3000 語レベルの得点の語彙力の強化が最も有効である、と指摘した [2]。

一方、石川と杉浦は、語彙的知識量とリスニング能力

との間には中程度の相関関係は見られるが、リーディング能力と語彙的知識量の間にはみられる相関関係ほど強くはない、とする海外での調査を報告し、リスニング能力に影響を与える要因には、語彙的知識量や文法知識以外の要因が存在するとした。そこから石川らは、単語そのものの知識の他に、単語がいくつか集まって用いられ、特定の意味をなす定型表現の知識がリスニング能力に影響している可能性に着目した。実験の結果、語彙的知識量とリスニング能力の間には有意な相関関係が認められなかったが、定型表現の知識量とリスニング能力の間には有意な相関関係がある、と結論づけている [3]。

これらの先行研究の成果を踏まえると、リスニング指導においては、基本 2000 語の語彙の定着を図りつつ 3000 語レベルの語彙力の強化を目指すことと、定型表現も導入できる教材を利用することが望ましいということになる。

そこで本稿では、外国語共通教育センターが共通教材として採用したリスニング教材を語彙面から分析し、扱われている語彙の量、難易度が妥当なものであるかどうかと、定型表現が適切に導入されているかどうかを検証することを目的とする。

## 2 テキストの分析

### 2.1 分析対象

本研究で分析したのは、平成 24 年度都市大スタンダードカリキュラム 1 年生前期、後期の必修科目である、Communication Skills (1) と Communication Skills (2) で教科書として採用した、American Headway Level 2 (Soars, J & Soars, L) Oxford University Press である。本テキストは、全 12 ユニット、154 ページからなる。本学では、このうちユニット 1~7 の中の Reading Section を除く全 68 ページを授業で扱っ

た。そこで本研究では、当該部分の中で学生が音声で学んだ素材のSCRIPTと、実際に練習問題などで読んだページを分析対象とした。

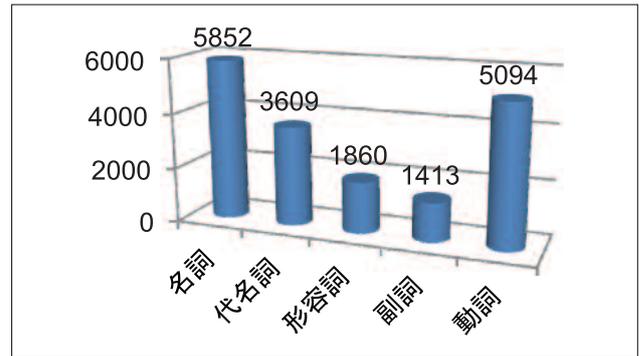
## 2.2 分析方法

分析は以下の方法で行った。まず、分析対象となった教科書の当該部分をOCRでテキストデータにし、テキストエディタを用いて分析に不必要なタグ等を取り除くクリーニングを施した。それからそのテキストをコンコーダンスソフトであるKH Coderにかけた(注1)。英語の解析には各単語に品詞のタグをつける必要がある。本研究では品詞のタグづけに、KH Coderに搭載されている、Stanford POS Taggerを用いた。総語数(Tokens)、異なり語数(Types)を算出したのち、抽出された単語を品詞ごとに頻度順に並べ、語彙リストを作成した。それからリスト中の単語の難易度をみるために、日本人英語学習者にとって重要な英単語リストとして大学英語教育学会(JACET)が編纂している、JACET8000(2005)と照合した。

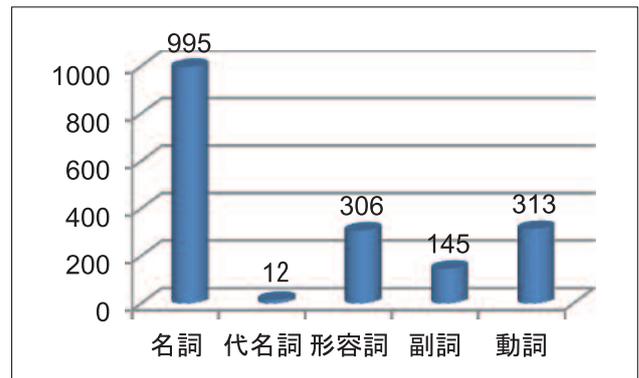
続いて定型表現の出現状況を見るために、KH CoderのKWIC Concordance機能を用いて定型表現の検索を行った。検索の対象は、石川と杉浦が実験項目として選定した、4語からなる23種類の定型表現とした。

## 2.3 分析結果

分析の結果、当該部分の総語数は38711語、異なり語数は3125語という結果を得た。表1は、語彙リストの中から、固有名詞、冠詞、間投詞を除き、頻度の高かった上位20位までの単語とその頻度を品詞別に示したものである。語彙リストの内訳は、頻度数で見ると、名詞12166回、代名詞3628回、形容詞3737回、副詞260回、動詞8039回であった。これを異なり語数で見ると、名詞995語、代名詞12語、形容詞306語、



グラフ1 品詞別頻度数 (数字は頻度を表す)



グラフ2 品詞別異なり語数 (数字は語数を表す)

副詞145語、動詞313語であった。(グラフ1, 2)。

抽出語の難易度をみるために、JACET8000単語リストとの照合を行った。その結果をまとめたのが表2である。抽出語の中で、名詞では61.5%が2000語レベルの単語、74.0%が3000語レベルの単語で占められていた。代名詞では85.7%が2000語レベル、92.9%が3000語レベル、形容詞では61.1%が2000語レベル、71.9%が3000語レベル、副詞では79.3%が2000語レベル、89.0%が3000語レベル、動詞では、83.1%が2000語レベル、88.8%が3000語レベルであった。

表1 品詞別抽出語上位20単語

品詞	頻度	品詞	頻度	品詞	頻度	品詞	頻度
time	91	I	1255	good	68	so	92
partner	74	you	843	last	56	really	84
question	73	it	374	many	43	very	68
sentence	72	he	298	complete	42	just	65
year	70	we	222	best	37	now	64
people	69	they	219	first	36	not	55
work	67	she	189	next	35	there	44
lot	65	yourself	7	other	35	much	39
night	62	its	1	new	34	here	38
phone	62	ours	1	much	30	then	35
thing	62	ourselves	1	more	29	always	34
job	61	theirs	1	old	27	again	30
conversation	59			great	26	long	26
day	53			correct	25	well	26
home	53			interesting	23	soon	25
friend	51			big	22	together	25
page	48			everyday	22	too	24
practice	43			nice	22	more	23
class	42			few	21	only	21
word	40			fantastic	19	sometimes	21

(再帰代名詞と独立所有格以外の格の代名詞は、すべて主格の中に含む)

表2 抽出語の難易度

	名詞	代名詞	形容詞	副詞	動詞
2000語レベル	61.5%	85.7%	61.1%	79.3%	83.1%
3000語レベル	74.0%	92.9%	71.9%	89.0%	88.8%

表3は23種類の定型表現を検索した結果、出現の有無をまとめたものである。4語からなる完全な形で抽出されたのは a few years ago, a friend of mine, at the end of, for a long time, I would like to/I'd like, there's a lot of の6種類であった。

表3 定型表現の出現の有無

定型表現	有無
a few years ago	○
a friend of mine	○
all of a sudden	×
all that kind of	×
or something like that	×
and things like that	×
at the end of	○
at the same time	×
every now and then	×
for a long time	○
for the most part	×
have a problem with	×
I thought it was	×
I was going to	×
I would like to/I' d like to	○
It just seems like	×
It used to be	×
or anything like that	×
and stuff like that	×
that sort of thing	×
that type of thing	×
there' s a lot of	○
when it comes to	×

### 3 考察

前項での結果を踏まえて、ここでは当該リスニング教科書が語彙面からみると妥当なものかどうか考察を加える。

まず量と質の問題である。分析した教科書の当該部分の総語数は 38711 語、異なり語数は 3125 語であった。前期、後期合わせて 28 回の授業で学習する量として、一見過不足は無いかのように見える。しかし、その内訳が問題である。異なり語として抽出された語の中には多数の固有名詞や oh, gee といった間投詞が含まれており、それを除いた内容語の異なり語総数は、

グラフ 2 で示すように 1771 語であった。これはリスニングを通じて学習が推奨される 3000 語には届かない数字である。また、動詞の総頻度数と異なり語数の差が大きい。これはすなわち同じ単語が繰り返し使われていることを意味する。結果的に出現する動詞は 313 語にとどまっている。リスニング教材では会話が主体であり、実際のコミュニケーションの場面でも比較的簡単な単語が繰り返し使われながら会話が進む。しかしながら、学習途上の者にとって、様々な単語に触れることは語彙の獲得過程において重要である。この、単語のバリエーションという点において、同教科書は問題を含んでいるといえよう。

続いて難易度についてみると、表 2 で示したように、抽出された単語の 60% 以上が基本 2000 語に分類されるものであった。3000 語レベルでみると、どの品詞においても 70% はこのカテゴリに入る。リスニングで 2000 語の定着を図ることと 3000 語レベルの語彙獲得を目指すならば、単語の難易度については妥当なものといえる。

最後に定型表現の使用状況について考察を加える。調査した 23 種類のうち、4 語が完全にマッチしたのは 6 種類であった。意味はほぼ同じであるが表現が異なるもの、例えば have a problem with に対して have a trouble with や that sort of thing に対して that kind of thing は使用されていたがカウントしていないため、実際には、定型表現は相当数使われていると思われる。このことから、当該教科書には定型表現も適度に埋め込まれているといつてよいであろう。定型表現の使用の有無は、教材内容の真性 (authenticity 教材中の英語表現がいわゆる教科書英語ではなくて実際使われている英語に近いものかどうか) の指標にもなりうる。その点からみても、当該教科書の真性は確保されているといつてよいであろう。

### 4 まとめ

本稿ではリスニング教材の語彙面に焦点を当て、使われている単語の量や質、難易度が適切か検証した。分析の結果、単語のバリエーションの点で問題がみられるが、概ね妥当な単語使用であるという結論を得た。しかしここで一つ問題を提示したい。それは、使われている単語がリスト上で適切な難易度であるとしても、それが音声で与えられると聞き取れない、という学習者にとってのリスニングの問題点である。

日本学習者はリスニング能力獲得過程でいくつかの問題に直面する [4]。第一は音素の識別の問題である。日本語は英語よりも音素が少ないため、識別しにくい英語の音素がある。例えば l と r などである。また、英語では単語が数語つながって音変化を起こすことがあ

る。I like it の k と i の音の連結や, Don't you know that? の t と y の音の同化などである。さらに, 英語では機能語は弱く内容語は強く発音され, 弱い部分は速くなるという速度変化が加わるため, 音声的リズムが生じる。そしてここへスピードの問題も加わる。音声で情報がもたらされるとき, 音は瞬時に消えてしまうため, 文字で提示されたときよりも素早い認知処理が求められる。聞き手は音素を聞き取り, 単語を識別し, 完全には発音されていない単語や単語の一部を推測で埋め, 前後関係をたよりに, 次々と与えられる情報全体の意味を再構築していかなければならない。

多くの日本人学習者にとって, 「単語を知っている」というのは, 文字で提示されたら意味がわかる, ということを意味する。しかしリスニングの場面では, 「音変化をしていたり, 速いスピードで示されても聞いてわかる」単語知識が求められる。これを踏まえて, リスニング指導の中に聞いてわかる単語を増やすためのトレーニングを入れていきたいと考えている。

## 注釈

(注1) KH Coder は立命館大学の樋口耕一氏が開発したコンコーダンスソフトである。詳細については <http://khc.sourceforge.net/> を参照されたい。

## 参考文献

- [1] 三根浩, 枝澤康代, 吉村満知子, 今井由美子, 布施邦子, 平岩葉子: “リスニングにおける語彙サイズと学習用方略,” 同志社女子大学 総合文化研究所紀要 第23巻 pp59-68 2006
- [2] 枝澤康代, 今井由美子, 古荘智子, 布施邦子, 三根浩: “大学生における語彙力と英語標準テストの関連性” 同志社女子大学 総合文化研究所紀要 第24巻 pp55-66 2007
- [3] 石川真美, 杉浦正利: “語彙的知識と定型表現の知識がリスニングに及ぼす影響” 名古屋大学大学院国際開発研究科 科学研究費補助金報告書 2008
- [4] JACET 教育問題研究会 (編): 新英語科教育の基礎と実践, 三修社, 2005